

京鹿子

令和二年六月一日発行
通巻一五〇号(毎月一回一日発行)

6月号

鈴鹿呂仁
拾掬集 その五十七



公園に浮雲ひとつ雀の子
子雀三羽軒下の紙芝居
古草の斜に構へる雨催
日和見の雲を赦さず花洛の忌
地球図の真つ赤な塗り糸花の闇
さまよへる巨^メ大^ロ都^ボ市^リの春の塵

下五への語脈の乱れ桜桃忌
玉響のまぼろしの君花篝
星追うて蛻の殻の蛇の衣
宇治吟行五句
琴坂の緑の風の円らなる
一景の宇治の山吹日を零す
宇治川のいさよふ波や余花残花
鳳凰の天翔けるごと藤咲けり
新緑の日は零すまじ浄土門

—近詠—

鈴鹿 仁



ぼうたん

ぼうたんの百花の揺れは百の夢
山の風やさしく吹けよ袋掛
袋掛け済みて指折るとりいれ崩

—追懐—

青梅や耳たぼ厚き出世びと「平成十三年作」
緑蔭の真ん中に立ち樹となれり「」

—近詠—

和田 照海



青岬

梵妻の某日さみし花大根
貝寄風や蟹一と汐を舟焚でる
一礁の浮力のつきし卯波寄す
揚雲雀クレイン直立して休息
藻塩焼く烟のさして青岬

松本 鷹根



塩貝 朱千

牡丹の芽

初音あり神の木洩れ日仰ぐ坂

山つつじ背高咲きなる尾根を攀づ

枝垂れ咲く花の傘下に歳解す

咲き充ちし花散り初むに休校す

直情を彩る旭牡丹の芽

近詠

万の雫

大樹より百羽とび出す春の雷

一番星真上に辛夷昏れ残る

桜待つところに透くる人の影

花万朶万の雫を抱きしまま

咲き満ちてふたひら舞はず花しぐれ

英華採集

地球儀の中は空つぽ地虫出づ

福 山林 すみ

季語「啓蟄」には、地中に巣ごもる虫が春になって意気揚々と地上へ這い出てくるという意があり、地中には生命としての源が存在していることになる。これを広く大きく捉えると地球そのものは一つの生命体として生きていることになるのだが、今の地球はどうなのだろうか、と訝しまざるを得ない。作者が見ている目の前の地球儀の中を空つぽと断定することによって現実の地球と重ねている。全世界のコロナの疫病は今後どうなるのか？作者の危惧は深まるばかりである。

賜はるといふ死もありしや利久の忌

豊 中宮 田 千優

茶道の宗匠としての利休と天下人としての秀吉とは、蜜月の時があり「利休」という居士号も宮中参内の折に勅賜されたものである。そして、その名を帝に奏上したのが大徳寺の古溪宗陳（こけいそうちん）で、名の由来を「老古錘」となつて、禪にはげめ」という意味で鋭さもほどほどにせよ、という教えを込めた「利休」である、と説明している。宗陳は、この時にして利休の心の裡をすでに見抜いていたのかも知れない。利休が切腹した理由には諸説があるが、「利を休め」の意を深く意識してれば歴史は大きく変化した、と言える。季語を敢えて「利久」としたところに俳味があつて面白し。

未だ風に変化球あり春浅し

京 都 宮 本 幸子

冬から春に向かう季節は、色々な風が吹き、人はその風を五感を通して春を感じるようになる。歳時記を引けば「春浅し」は、立春後の日が浅く寒さが残り春らしい気配が整っていない季節、とある。これを踏まえると掲句の「未だ風に変化球あり」は、言い得て妙があり、「早春」の季語との違いがよくわかり、語感としての情緒性を感じる。風が変化球から直球に変わる春が待ち望まれるが、作者の心はずでに春に向いているのではないだろうか。

春の水 藤岡 紫水

生き生きと村を出る水路のたう
春光や水天一如鳩の湖
風の綾日の綾乗せて春の水
柔らかに空突き上げて花辛夷
巻癖の網目も定か黒鯛の海

夏はじめ 沼田 巴字

人の世に後悔多し夏落葉
若き日の青き痛みや明易し
衣更へて猫背の背_ヲを正しけり
柏餅わが晩年のこころざし
砂丘にて一家の写真夏はじめ

山の彩 丸井 巴水

曖昧な記憶で生きて春がすみ
芽柳や帰り着きたる杜氏の文
初蝶が一揆砦の川を越す
柳に芽泣く子ひとりの縄電車
冬眠の目覚めうながす山の彩

節は春 植村 蘇星

すべからく時流に生きて節は春
累代を語る坪庭梅古木
袋掛己が心を包み込み
入学児はしやぎ妹消気てをり
無礼講類が類呼ぶ花むしろ

風 花 直江 裕子

火のやうにさみしい男風花す
花咲いて一気呵成に老いのくる
如月のページ繰るごと夫逝けり
海市から戻らぬひとの靴が着く
陽炎をそつと襪によもつひらさか

花の雪 伊藤 希眸

重箱の疵も彩り雛の鮓
エンドロール転た寝誘ふ花の昼
春愁の底を無心の深海魚
花の雪着地の音はすぐ消ゆる
季はづれの春雪予報姉逝けり

雨水のう 高木 晶子

春野菜四苦ののれんをはね上げて
時流しつゝけ一刻春の川
終りまで続けることよ雨水のう
厄病の便りはあれど雛祭る
白木蓮祝儀袋を用意して

勿忘草 奥田 筆子

枯巨木洞に蜂蜜密造す
春の鳥飲むと言ふことむつかしき
老ざくら川へ川へと傾むきて
われひとり勿忘草のこちら側
地図に残るYの字の川花万朶

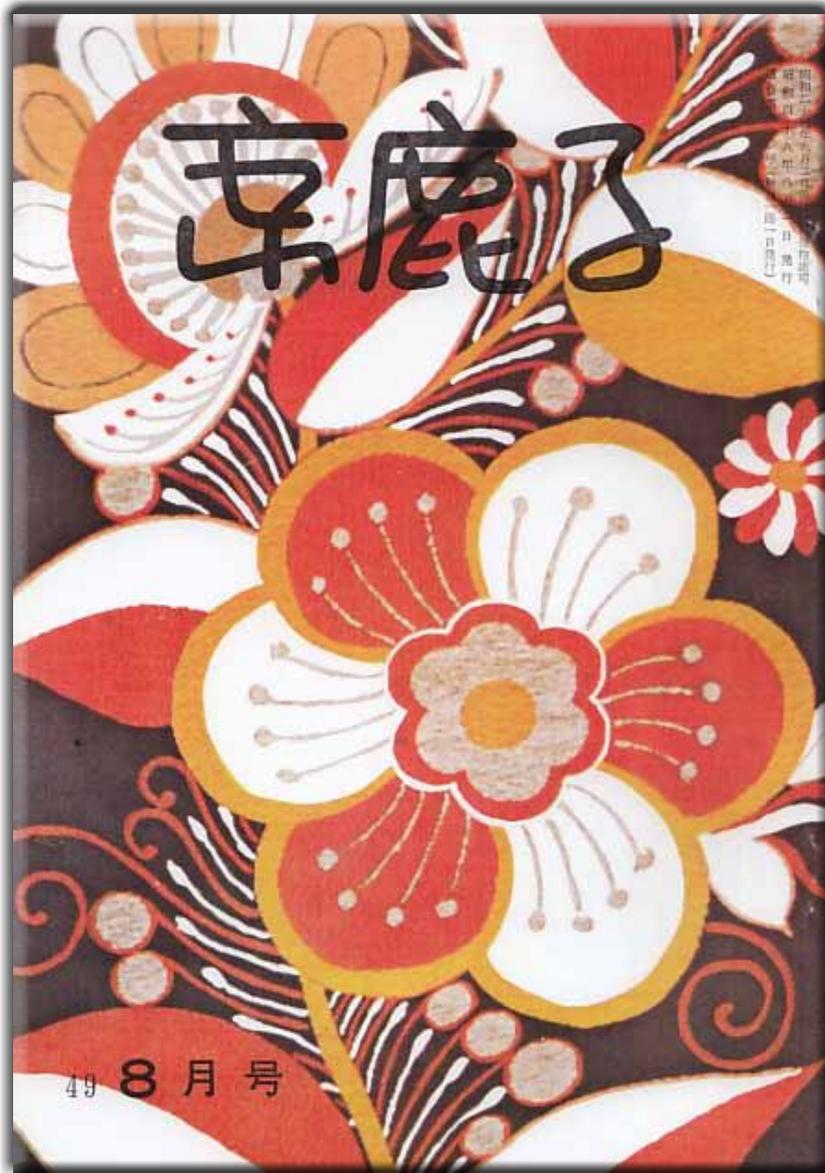
神麓集

草の笛 井上菜摘子

青山河てのひらを過ぐ父や母
渋滞の五台先から風船とぶ
大真面目のふまじめな音草の笛
はたらかぬ二割の蟻も齷齪と
せめてもの償ひ日傘さしかける

猫の鈴 村田あを衣

立砂のまとふ春光神たたふ
やき餅を買うて日永の神参り
おぼろ夜のわたしを誘ふ猫の鈴
飛ばされし帽子は海へ蝶となる
縄とびの大波小波とんで蝶





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

日表も日裏も密に梅つぼみ

京田辺 山中志津子

神鷄のきしみ鳴きして浅き春
蠟梅の古木のつくる静寂なり

みつうみの吐息のやうな白魚舟

侘助の葉隠れ噂の真偽はも

底力ためされてゐる大冬木

京 都 井尻 妙子

焼餅の売り切れご免風二月

白梅や社家に目立たぬ暮し向き

春菜摘む賀茂の婆ばの小商ひ

手招きに二の足を踏む春の鴨

芽吹きどき電光ニュースペラペラと

城 陽 鷺山 珀眉

とある日の午後のアンニユイ鳥雲に

鐘霞む土偶三千年の黙

神山の遅日に絡む風の音

落椿土の温みは母の愛

別れ霜踏む真つ新の靴で踏む

福 山 亀井 福恵

芦の角鷺の思案は噴あげて

ひとり居の終の栖よ春障子

下萌ゆる光陰白き鷺翔たす

待ち合はす橋にも袂水温む

波つむぐ吐息へ空へさくら貝

福知山 西村 白杼

早春の天の羽ごろも与謝郡

百周年絆ひろげし水仙忌

晩年は時どき惚けも春の波

鍵穴の向かう小さき芽吹き音

身の飾りはづして芽木と語り合ふ

京 都 菊池 和子

逢うてゐる刻の短かさ都鳥

芽木ふむ人語に鳥語和す日和

身を切らる風のあしもと露の臺

薄ら日をあつめ集めて桜の芽

春一番メモ帳ちぎれ蝶となる

高 槻 安田 優歌

うすうすと暮春の山河杭を打つ

春あけぼの木の声水のこゑさやか

銀スプーン磨き朝東風すくひけり

ふる里にゑくぼの親子草の餅

徳川の印の礎石や花の霧

大 阪 本郷 公子

父の字の右肩上り葦の角

地球儀の空は透明春しぐれ

花切手並べ留守居の春の雨

光陰の飛花ふたみひら能舞台



地球儀の中は空つぽ地虫出づ

福 山 林 すみ

風呂敷の角を揃へて二月尽

野の春は光ることよりはじまりし

影はみな同じ方向く春の朝

賜はるといふ死もありし利久の忌

豊 中 宮田 千優

利久忌や一人居に足る四畳半

露の臺苦言を胸にあたたむる

落味噌を葉のやうに舐め一献

未だ風に変化球あり春浅し

京 都 宮本 幸子

窓を拭き三月の空塗り替へる

春空に鳶は草書でラブレター

心まで攫はれさうな春嵐

弟の手引き銭湯おぼろ月

アリゾナ 伊吹 之博

独り言やめれば無音おぼろ月

投票日校舎の影におそ桜

春の旅戻る居場所のあればこそ